令和６年度　第２回総合教育会議

日　時　令和７年２月 19 日

午後２時 00 分開会

場　所　A301－302 会議室

１　開　会

〇林企画部長

定刻になりましたので、令和６年度第２回総合教育会議を開催いたします。よろしくお願いいたします。

この総合教育会議は、飯田市長と教育委員会が教育施策につきまして協議、調整をする場であり、法律に基づいて決められた会議でございます。地方公共団体に設置されるため、企画部で事務局をさせていただいております。

本日、司会進行をさせていただきます林と申します。よろしくお願いいたします。

２　あいさつ

〇林企画部長

まず、ごあいさつをいただきたいと思います。佐藤市長、お願いいたします。

〇佐藤市長

皆さんこんにちは。今年度２回目の総合教育会議ということで、麦島委員は初めてだと思いますが、よろしくお願いしたいと思います。

２月に飯田市キャリア教育推進フォーラムや飯田市公民館大会があり、いずれもこどもたちの育ち・学びと地域との関わりが一つのキーワードになっていました。いずれも我々が取り組んできていることは間違っていないことを確認したような内容だったと思います。地域の関わりの中で、こどもたちがいろいろなことを考えて自ら実践に移すことが、この地域のこどもたちの学び・育ちに非常にいい形で影響を及ぼしているのではないかと感じました。

今年度１回目の総合教育会議では、「ムトスの学びとは何か」について議論をしましたけれども、飯田で学ぶ「ムトスの学び」の中では、こどもたちが自分の好きや興味あるいは自分が人生の中で大事にしたいことが見つかる、そんなこどもたちの学びだという議論をし、私としては非常に腹に落ちています。

今日の会議の目的として、１点は飯田市教育大綱の策定に向けて議論をしますが、この教育大綱は市長部局が主導して総合教育会議の中で意見をいただいて策定することになっています。今申し上げた「ムトスの学び」を中心に据えて、次の教育大綱を策定したいと今日は御提案を申し上げま

す。教育委員会としては教育振興基本計画を策定しますし、市全体としては総合計画として「いいだ未来デザイン 2028」を策定するわけですが、いずれも令和７年度から後期４年間という期間に入っていきます。そういった中で飯田市教育大綱をどういう形で策定するか。私としては「ムトスの学び」をこれからの飯田市の教育の中心に据えるべきキーワードだと思いますので、その話を中心とした議論をしていただければありがたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

〇林企画部長

ありがとうございました。続きまして、熊谷教育長ごあいさつをお願いいたします。

〇熊谷教育長

今年も２回目の総合教育会議になります。前回は「ムトスの学び」についての考え方が非常に良い意味で質が上がり、広がったと皆さんの意見をお聞きしていて感じたところであります。

昨年「ふてほど」という言葉が流行語大賞になりました。「不適切にもほどがある！」というドラマの中で、昔のこどもへの関わり方や学校での先生の事実が描かれており、今から思うと不適切ですが、自分が教員になった当時は当たり前にやっていたと感じました。でもあの頃は地域のこどもたちが自分たちで集まって、お正月のお祝いやどんど焼きを作りました。やらされていたというより自分たちでやっていたような感覚でいたと思い出しました。

昨日、水田農業に関する書類が届きました。今までは集配されていましたが、今年から自分で提出先に行って提出するように変わりました。役員の方が大変なので、効率化することは便利になってありがたいと思う反面、このままそれが進んでいったときに、人と人との関わりがどうなっていくのか不安も正直あります。「ムトスの学び」が、個人だけで終わるものではなく、追求、探究していく中で人と人との関わりが必要に応じて生み出されていくと良いと思っています。

栗山監督と全国の小学校の校長会の会長との対談を見ましたが、栗山監督もＷＢＣの時には最終的にどういうチームを作りたいのかみんなで共有していくことがすごく大事であり、そのことによって自分事として感じられ、選手一人一人が活躍したという内容でした。私たちもこの飯田市教育大綱を考えるに当たり、どういう地域あるいはどういう学校になっていくのが良いのか思い浮かべながら考えることが大事だと改めて感じました。今日はよろしくお願いいたします。

〇林企画部長

ありがとうございました。

３　意見交換

〇林企画部長

本日の意見交換のテーマは２つございます。１つ目は「次期 飯田市教育大綱の策定に向けて」、２つ目は「自己有用感や自己肯定感を感じる「ムトスの学び」とは」でございます。１つ目の教育

大綱につきましては、今年度、教育委員会では「教育振興基本計画後期の取組」、行政部局では「いいだ未来デザイン 2028 後期計画」を策定してきておりますので、この２つの計画を踏まえ、新たな飯田市教育大綱を策定したいと思います。今回は素案をお示し、御意見を伺いたいというものでございます。教育大綱の中心に「ムトスの学び」を据え、地域を愛する人材を育んでいきたいと考えております。テーマ２では教育大綱の内容を受ける形で「自己有用感や自己肯定感を感じる「ムトスの学び」とは」というテーマで意見交換をお願いいたします。「ムトスの学び」をどのように実践していくのか、大切にすべき視点など幅広く御意見をいただきたいと思います。テーマが２つに分かれておりますが、メインはテーマ２で御議論をいただきたいと考えております。

（１）次期 飯田市教育大綱の策定に向けて

－今後４年間の取組の方向性の共有と理念の構築に向けて－

〇林企画部長

１つ目のテーマとして、「飯田市教育大綱（素案）について」説明をさせていただきます。説明の後、大綱の位置付けや建付けについて質疑の時間を設けたいと思いますのでお願いいたします。それでは事務局お願いします。

〇澤柳企画課長

企画課の澤柳です。「教育大綱とは何か？」と「次期飯田市教育大綱の素案について」御説明をさせていただきます。資料№.１－１を御覧ください。まず教育大綱について改めて御説明させていただきます。教育大綱の策定は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第１条の３第１項に市長の策定義務について、第２項に大綱を定めるときは「総合教育会議」において協議すること、第３項では大綱の公表義務が規定されています。協議により定めた大綱は、教育委員会にも尊重の義務が課せられます。教育基本法を参酌いたしますが、それぞれの地域の実情に応じて柔軟な策定をすることができます。飯田市教育委員会が定める教育振興基本計画を大綱とすることも可能でございます。大綱の計画期間に法律の定めはございませんが、概ね４～５年程度が想定されております。

当市における大綱策定の経緯について御説明をさせていただきます。飯田市では、平成 28 年度まで総合教育会議での協議を経て、飯田市教育振興基本計画を飯田市教育大綱に代えて運用してきました。平成 29 年度からは飯田市の総合計画「いいだ未来デザイン 2028」と教育分野の総合計画「第２次飯田市教育振興基本計画」が同時にスタートすることから、総合教育会議での協議を経て、教育振興基本計画の代替ではない新たな飯田市教育大綱を策定いたしました。

次期飯田市教育大綱の素案について説明をさせていただきます。資料№.１－１の裏面と資料№.１－２を併せて御覧ください。この度「いいだ未来デザイン 2028 後期計画」と「第２次飯田市教育振興基本計画後期の取組」のスタートに併せまして、両方の計画の関係性と基本的な方針を定め、

それに向かう取組の方向性として両計画を位置付け、分野横断的、全庁的に「ムトスの学び」の実践につなげていくことを次期飯田市教育大綱として定めたいとするものでございます。資料№.１－２の基本的な方針は、飯田市教育振興基本計画後期の取組の柱「市民一人一人が、私の問いや願いをもとに学びを深め、好きや得意を見つけて共感しあい、小さな幸せを積み重ねることで、地域を愛する人材を育む」と「いいだ未来デザイン 2028 後期計画」の基本目標３のねらい「こども・若者が地域づくりに主体的に関わることで、自己有用感、自己肯定感を感じることができ、未来を描き実現に向けて生き抜いていける基礎を育む」こと、また、「市長部局と飯田市教育委員会が連携したムトスの学びの実践により、市民の学びを支え、輝きやうるおいのある豊かな暮らしを実現する」ことを掲げてございます。

大綱の期間は「いいだ未来デザイン 2028」、「第２次教育振興基本計画」ともに４年ごとにそれぞれ基本目標や重点の取組を見直すサイクルでございますので、この期間に合わせて令和７年度から令和 10 年度までの４年間とさせていただきたいとするものでございます。

また、「いいだ未来デザイン 2028 後期計画」の基本目標と「第２次飯田市教育振興基本計画後期の取組」をお示しさせていただき、これを結ぶ中心部に「ムトスの学びの実践」があることを概念図で示させていただいております。私からの説明は以上でございます。

〇林企画部長

この後「いいだ未来デザイン 2028」や「教育振興基本計画」についてはもう少し詳しく御説明させていただきますが、大綱の位置付けや建付けの部分で御質問があればお願いいたします。

〇佐藤市長

これまでの大綱について説明をお願いしたい。

〇澤柳企画課長

教育大綱（2017～2020）が飯田市教育大綱として初めて策定したものです。今回の教育大綱と同じように「いいだ未来デザイン 2028」と「第２次教育振興基本計画」がスタートした年であり、それぞれの基本目標と取組が策定され、これらを結ぶ３つの理念を掲げております。教育大綱を一言で示すのであれば「結」が根底にあるとし、第１回目の教育大綱として定めたものでございます。

教育大綱（2021～2024）では、引き続き根底を「結」とし、「いいだ未来デザイン 2028 中期計画」と「教育振興基本計画中期の取組」の内容が同じ取組だったため、両計画同じ目標を重点目標に掲げて策定をした経緯がございます。以上です。

〇林企画部長

過去の大綱について御説明をさせていただきました。御質問や御意見はございますか。

○参加者

―質問する者なし―

（２）自己有用感や自己肯定感を感じる「ムトスの学び」とは

－こどもまんなか社会の実現に向けて－

○林企画部長

テーマ２へ移ります。次期教育大綱は、２つの計画の考え方を共有し基本的な方針を固め、取組の方向性としてそれぞれの計画を位置付け、それをつなぐものとして「ムトスの学びの実践」という形で組立てをさせていただいております。市長部局は後期計画を作成するにあたり、「こどもまんなか社会」の実現に向けた施策を基本目標の一つに位置付け、令和７年度から分野別横断的な課題として全庁的に取組を進めていこうとしております。こども未来健康部から取組の方向性について御説明させていただきます。お願いいたします。

○筒井こども課長

こども課の筒井と申します。よろしくお願いいたします。資料№.２－１「こども基本法とは？」を御覧ください。こどもや若者の皆さんは、一人一人がとても大切な存在です。自分らしく幸せに成長でき、暮らせるように、社会全体で支えていくことがとても重要です。そのような社会を築いていくため、令和５年４月にこども基本法を施行し、こども家庭庁が創設されました。

こども基本法について御説明します。この法律の目的は、全てのこどもが将来にわたって幸せな生活を送ることができる社会を目指して、社会全体でこの施策を進めていくことです。国、県、市町村は、この法律に沿ってこどもや若者に関する施策を進めていきます。「こども施策」とは、「こどもの心や体の成長をサポートすること」「子育てをする皆さんへのサポートをすること」の大きく２つに分けられます。まず、「心や体の成長をサポートすること」の具体例として、こどもの居場所づくり、いじめ対策などが挙げられます。「子育てをする皆さんへのサポート」としては、働きながら子育てしやすい環境づくり、相談窓口の設置などが挙げられます。「こども」とは心と身体の成長の段階にある人を指します。18 歳や 20 歳といった年齢で必要なサポートが途切れることなく受けられるようにしていきます。こども施策は６つの基本理念を基に実行されます。こども施策を進めていく上で大切なことは、こどもや若者の意見を聴くことです。意見聴取の方法は、直接話をしながら聴くことやインターネットを活用しアンケートを実施するなど幅広く取り組む必要があります。市町村等は施策の目的を踏まえ、聴かせていただいた意見を尊重し、施策等に反映できるか検討した上で、こども施策に取り組んでいきます。こども・若者の意見を聴き、意見が反映されていくことで、自己肯定感・自己有用感が育まれ、こども・若者がより暮らしやすい社会をつくっていこうとするものです。このような国の流れを踏まえ、こども・若者の意見を傾聴し、こど

も・若者の視点で物事を考え、総合的に取り組むことで、飯田市でもこども・若者が希望を持てる、こどもまんなか社会の実現に取り組みます。

資料№.２－２を御覧ください。当市の総合計画である「いいだ未来デザイン 2028 後期計画」を今年度策定し、基本目標３に「飯田で育ってよかった・育ててよかったと実感できるまちをつくる」と設定しました。主なねらいは、こども・若者の視点で物事を考え、こども・若者がまちづくりに主体的に関わり、自己有用感や自己肯定感を感じられる文化、風土をつくること、こども・若者・保護者等誰もが飯田で育ってよかった・育ててよかったと実感できるまちづくりを進めることとし、こども・若者の意見を傾聴すること、発達段階に応じて生き抜いていける力の基礎を育む教育の実施や全てのこどもにとって魅力ある学びの環境をつくります。子育てに魅力を感じられるような支援や様々な困難を抱えるこども・若者への経済的支援、こどもの視点を取り入れた公共施設や社会基盤の整備等に戦略的に取り組んでいきます。これまでも子育て支援に取り組んできましたが、当市のこどもの数は減少しています。こどもまんなか社会の実現のため、こども・若者が意見を言える場を創出し、意見が反映されることで自己有用感や自己肯定感が醸成され、飯田市は自分の意見を聴いてもらえるまちだと感じてもらえるようにします。自分の考えや意見を聴いてもらい、周囲に認めてもらうことで、たとえ自分の意見が全て叶わないにしても、前向きに考え、学び、伝え、共有し、みんなで考えるという好循環を作り上げたいとするものです。飯田市への愛着が高まり、一旦進学等で飯田市を離れても戻ってきてもらうことで、人口減少のスピードを緩やかにし、地域の持続性を高めていきます。資料№.２－３は、今年度の当課が行った「こども・若者からの意見聴取」に関する取組を一覧表にまとめた資料となります。聴かせていただいた意見は、今年度策定した「いいだ未来デザイン 2028 後期計画」や「飯田市こども若者まんなかプラン」に反映されました。当課の関連分だけとなりますので、全庁的には更にたくさんの意見を聴かせていただいております。聴かせていただいた意見を全庁横断的に情報共有、連携する場を設け、毎年の事業の組立てに反映し、予算化や事業実施につなげていきたいと思います。こども・若者の意見を聴く更なる取組として、児童福祉分科会に「こども・若者枠」として 16 歳から 39 歳までの２人の枠を新設し公募しています。これまで大人を中心に議論されてきましたが、こども・若者も一緒に議論をしていきます。

最後に、先日開催された飯田市キャリア教育推進フォーラムで、自ら学び、考え、多様な主体と連携、協働しながら実行する素晴らしいこども・若者がこの地域にいることがとても喜ばしく頼もしく思いました。活動報告により、自分もやってみよう、考えてみようといった良い影響が同世代の皆さんに広がると良いと思います。そして、こども・若者だけでなく、私たち大人も自らよく考え、できることを行動に移していかないといけないという気持ちになりました。私からは以上でご

ざいます。よろしくお願いいたします。

○林企画部長

続きまして、教育振興基本計画後期の取組について説明をお願いします。

○後藤生涯学習・スポーツ課長

資料№.３「第２次飯田市教育振興基本計画後期の取組」を御覧ください。昨日行われた定例教育委員会で御説明を申し上げ、承認をいただき、決定したものになります。「ムトスの学びで未来をつくる」をキャッチフレーズとして、後期の取組は行っていきます。今後４年間取り組んでいく柱は「私の問いや願いをもとに学びを深め　好きや得意を見つけて共感しあい　地域を愛する人材を育みます」となります。後期４年間の取組として重点目標を２つ掲げさせていただきました。重点目標１として「「ムトスの学び」を実践し、豊かな心とこれからを生きる力を育む」、重点目標２として「多様な学びや交流を通じて、共感の輪を広げ、輝きやうるおいのある地域をつくる人を育む」と掲げ、それぞれアクションプログラムに基づき事業を行っていくことを予定しております。説明は以上でございます。

○林企画部長

ここで議論の参考といたしまして、それぞれの計画の基本的な方向性や施策レベルの取組の方向性のお話をさせていただきました。現在、市長部局と教育委員会がこどもを対象として実施をしている事業の一覧について御説明させていただきます。

○澤柳企画課長

資料№.４－１のＡ４横型の資料を御覧ください。こちらは現在実施している事業を取りまとめた資料でございます。対象年齢ごとに自分自身の意志や考えに基づいて行動することを目的とした「主体的な事業」、知識の提供や啓発といった他から作用が及ぼされる「受動的な事業」を分類しております。資料№.４－１のＡ４縦型の資料は、事業の視点で並べたものでございまして、いずれも現在実施している「ムトスの学び」のきっかけになり得る事業をまとめたものです。こどもの育ち、学びの過程でこども・若者の意見を聴き、自己肯定感、自己有用感を感じることができる取組に今後していきたいと考えているものです。説明は以上になります。

○秦野教育次長

教育委員会の「ムトスの学び」のきっかけとなる事業のまとめについて説明をいたします。市長部局の事業と同じような形でまとめさせていただいておりますが、社会教育系列の事業につきましては、誰が先生で誰が受講者かというよりも、ともに育ちあっていく観点が強いことがありますので、「主体的」「受動的」という分け方はさせていただきましたが、全ての面において自分の好きや得意を見つけるきっかけになるための主体的な事業であると考えてよろしいと改めてこれを作成

した後に思いました。様々な事業がございますが、一方的な事業ではなく、こどもたちと一緒に大人も育っていく事業になっております。よろしくお願いいたします。

〇林企画部長

ここから意見交換に入らせていただきます。委員の皆様から御発言いただきたいと思います。御説明させていただいたことを参考にしていただきながら、自己有用感や自己肯定感を感じる取組について、どのように「ムトスの学び」を実践していくのか、大切にすべき視点など幅広く御意見をいただきたいと考えております。行政部局や教育委員会でそれぞれの取組がございますので、様々な角度から御意見をいただき、深い議論をしたいと思います。積極的な御発言をお願いいたします。順番を決めておりませんので、御発言をいただける場合には挙手をしていただき、こちらで御指名をさせていただきます。それではお願いいたします。

野澤委員、お願いいたします。

〇野澤委員

この大綱の素案を見て、「ムトスの学びで未来をつくる」とは、誰がムトスの学びで、何の未来をつくるかをわざとぼかしてあると思っています。教育というフィールドで言うと、それはこどもたちが自分たちの未来をつくるものだし、そうでないフィールドでもそういう解釈ができるのではないかと考えています。「ムトス」とは何かと考えると、内発的な自主性だと思うので、最終的には人生に対して志を立てることだと思っています。志を立てるのは人それぞれタイミング、年齢、それまでにあった出来事、それまでに出会った人たち、そういうものが全て折り重なってできています。いろんな方面からたくさんの経験や知識が折り重なって初めて成り立っていくと思うので、いろんな施策は全て無駄ではないと思っています。でも、１番こどもに影響を与えるのは御家族です。ここがどうしても教育現場では巻き込めないと感じています。先生の考えていることが保護者と透明性が高い状態を保てることができれば、御家族と教育の現場がさらに一体感を持っていろんな施策が有効に働いてくると思いました。こどもたちが受けたことに対して動くことが目的になるので、ああしろ、こうしろでは絶対駄目で、影響力の強い人から受けることができるとすごく良いと思います。手法は分からないですが、我々が考えていることは、本当に良い結果が出ていると感じますが、それをもっと広げていくためには、透明性を高めていくことがすごく大事だと感じています。以上です。

〇林企画部長

ありがとうございます。林委員お願いいたします。

〇林委員

資料を見て感じたことですが、主体的か受動的かで分けていますが、教育に関してもこういった

いろんな事業に関しても、参加する場は行政側や学校側がつくります。最初から主体的に参加者になっていることはないです。参加したことによってその場で学びながら、参加者全員が学び合っていくと考えていまして、これは受動的だと言い切ってしまうのはどうかと感じました。事業そのものを用意するのは、行政や学校といった大人側ですが、参加することによって、それが伝えられるものからだんだん主体的になっていきます。学校教育でも最初から主体的に「私も学びます」と言って学校に入るのではなく、与えられるものの中から自分の受動的だった部分がだんだん主体的に変わっていきます。それは関わる大人やいろんな環境の中で変わっていきます。この資料で主体と受動を分けてしまうことに違和感がありました。非常に分かりやすく「ムトスの学びで未来をつくる」というところがシャキっとまとまってきていて、私も「なるほど」と思っています。キャリア教育推進フォーラムや公民館大会を見させていただくと、地域の人に受け入れられること、どの活動を通しても相手の喜びが自分の喜びになるという、公民館大会でも牧野先生がまとめてくださいましたが、良い循環が生まれていく実例を見させていただき、最初に主体的だったかどうかは分かりませんが、そういった場をこどもたちが選んでいく中で良い循環ができていることが良かったです。これからの「ムトスの学び」でも相手や地域があってこその自分だと、常に気付きながら進めていけると良いと思います。以上です。

〇林企画部長

ありがとうございます。麦島委員さんお願いいたします。

〇麦島委員

教育委員になり２カ月間様々な活動をさせていただきました。教育委員でなければ行かないような会やイベントにたくさん参加させていただいたからこそ、自分自身も学び多い２カ月だったと思います。次期飯田市教育大綱の「ムトスの学びで未来をつくる」ことは、物質的に恵まれている時代ですが、物質的なものばかりを求めるだけではなく、市民一人一人が常に学ぶ姿勢を持ち続けて、主体的に行動することによって、自己有用感、自己肯定感を抱き、人間力の向上など精神的に豊かになり、それが結果として地域愛、社会貢献、自分自身の幸せにつながると考えます。これからの時代を生きるために、大切なことをともに学んでいける素晴らしい理念であると思います。また、先日キャリア教育推進フォーラムと公民館大会のディスカッションに出席させていただき、１番着目したのは高校１年生の生徒２人です。うちの息子のお友達であり以前からお２人の活躍は知っていましたが、「地域や地域の人と積極的に関わりながら自分の好きを披露したい」、「今後も地域と関わっていきたい」と強く発信されていて、義務教育を終えたばかりの年齢で地域を愛する人材に育ち、「ムトスの学び」の理念のモデルのようなお子さんたちだと思いました。お２人の言葉や意見を感心しながら聞いておりましたが、今後「ムトスの学び」を掲げ実践していくにあたり、パネ

ラーとして登壇したこどもだけではなく親御さん、御家族、身近に関わってきた公民館長さん、地域の方々からその子を大切に育ててきた実体験を聞くことこそが最も参考になると思いました。私自身も現在進行形で子育てをしている一保護者として、「どうしたらそのような子に育つのか」、「そのように育つための子育ての秘訣って何か」が保護者にとって１番関心があるのではないかと思いました。既に叶えている人から話を聞くことで、答えは人や家族の数だけあると思いますし、必ずしも同じやり方が自分に合うとも限りませんが、自分なりにアレンジして学んでいくことが大事だと思いました。ただ、一人一人の幸せの形は違いますし、飯田市の全てのこどもを理想のモデルのように育てましょうということでは決してなく、それぞれが自分の幸せを追求できるように、安全・安心の中、一人一人が尊重されて、生き生きと成長できる学びの理念に、この「ムトスの学び」がなれば良いと思います。また、「ムトスの学び」は学校教育だけで叶うものではなく、基本は家庭、地域との関わりや協力があってこそだと考えているため、市民に広く周知や共有することの必要性を感じています。以上です。

〇林企画部長

ありがとうございます。北澤教育長職務代理者お願いいたします。

〇北澤教育長職務代理者

「ムトスの学び」を中核にして「未来をつくる」という方向性を示していて、ワクワク感がある教育大綱になっていると思っているのが結論です。教育振興基本計画の教育ビジョンの冒頭が「結いとムトスの心が息づき」で始まっていますが、それを受けて教育振興基本計画の６つの方針の１番目が「「地育力」により、「ムトスの心」と「結いの心」を育みます」となっており、この２つの心のうちこれまでの教育大綱は、「結」として人や組織やいろんなものとのつながりを前面に押し出してきたわけですが、今度は「ムトスの学び」を主にしていく。どちらが先ではなく、互恵関係だと思っています。今までの大綱も「結」を成り立たせる前に、一人一人が自分から一歩踏み出さないとつながりは生まれないと思います。これまでの人生を考えると、人生とは本当に出会いの連続でした。良き出会いの連続で自分のような者でもここまで生きてこられたという思いが強くあります。でも、その出会いを考えてみると、日常の中には山ほど経験があって、目の前を出会いが流れていきますが、自分が一歩踏み出していないと出会いとして成立しない。目の前から日常として流れてしまうだけで、自分にとって意義ある出会いにはならない。要するに、出会いは向こうからやってくるものではなく、自分がそのとき必要があって一歩踏み出すことで、そこに出会いが成立する。本当は尊い出会いが目の前にいっぱいあったのかもしれませんが、踏み出し方が足りなかったり、感性が弱かったりしたために、出会いにならずに流れてしまったものの方が数倍あると思っています。そう考えると、１番源になる一歩踏み出す「ムトスの心」、「何々しようとする」を大綱

の真ん中に位置付けていくのはとてもワクワク感があると思い、今回１番その思いを伝えたいと思いました。

別の視点から申し上げると、一昨年の総合教育会議で読解力のことを話題にしたとき、生成ＡＩのことも少し話題になりました。そのとき「生成ＡＩ」なんていう言葉は、直前に新聞に出たばかりでした。あれからたった２年で今はもう生成ＡＩの活用や国を挙げて開発競争が進んでいます。こどもたちは学校でタブレットを当たり前のように使っていますが、これだってまだ学校に入って４年です。今はスマートフォンが必需品で放せませんが、10 年くらいのものです。世の中が流れていて、距離や空間を簡単に突破して、真偽は分かりませんが、膨大な記憶や情報量が行き来する中で、今後ますます加速していくと思います。本日キーワードになっている自己肯定感や自己有用感を持ちながら生きていくためにできることは、現実にしっかり自分の体を寄せて、目を凝らして、自分で「こうなのかな」と推測したり、判断したりすることで生き方を決めていくとき、実感を伴う経験を通して、最後に自分で判断できる学びを続けていくことが大事だと思っています。そういう力をできれば早い時期からつくることが重要で、根っこのところに「ムトスの学び」が座っていくと思っています。この大綱の方向に私は大賛成ですし、このワクワク感のある大綱を庁内だけでなく、市民の皆さんにも理解してもらいながら進んでいくと良いと思っています。以上です。

〇林企画部長

ありがとうございます。

大綱の大きな方向性についても御評価いただきました。野澤委員お願いいたします。

〇野澤委員

今のワクワク感という話にすごく共感しています。先ほど、こどもの定義がありましたが、もしかするとそういう気持ちを持っている大人がたくさんいれば、こどももそういうふうになるのではないかと思いました。

〇林企画部長

ありがとうございます。麦島委員お願いいたします。

〇麦島委員

普段心理カウンセラーをしているので、「ムトスの学び」と心理学を結びつけた話をさせていただきたいと思います。図を描いてきました。自分にとって「ムトスの学び」とは何かと考えたところ、自分の好きや得意に気付き、自他の幸せを追求する学びだと考えました。ここでまず用語解説に「「ムトスの心」とは、地域のために自ら進んで行動する意欲」と書かれており、「ムトス」とは「何々したい」という人間の欲求の一つだと考えます。図で説明させていただきますが、これからお話しする「マズローの欲求５段階説」は、心理学だけではなく会社の研修やモチベーシ

ョンの研修、経営学、看護学などの幅広い分野でよく紹介されています。これはアブラハム・マズローさんというアメリカの心理学者が、人間は自己実現に向かって絶えず成長すると仮定し、人間の欲求を５段階の階層で理論化したものになります。１番の土台のところから「生理的欲求」として、食事、睡眠、呼吸など生存に関する欲求があります。これらが満たされると２番目に「安全の欲求」に進みます。「安全の欲求」は、身体的安全、経済的安定、法や秩序が守られるなどの安全・安心に暮らす欲求になります。各段階の欲求は完全に満たされなくても、ある程度満たされれば良いと言われています。２番の「安全の欲求」が満たされると次に３番目の「所属と愛の欲求」に上昇します。社会に属し、家族や友人との絆を結ぶために、心からつながる良好な人間関係を人は求めるようになります。それが満たされると、今度は４番目の「承認欲求」を満たしたくなります。他人に認められ、周りの人たちから賞賛や尊敬、地位や名誉を求めるようになる欲求に進みます。それが獲得できると、１番ピラミッドの上位である５番目の「自己実現欲求」が湧いてきます。自分の強みや可能性に気付いて、それに向かって成長し、最高の自分を実現したい欲求、自分らしさを見つけてそのとおりに生きようとする欲求が生まれるという欲求の５段階理論になります。さらに「プラスアルファ」として、それを満たすとそのまた上位に「共同体の発展欲求」「社会貢献欲求」につながっていくと言われています。「ムトス」の欲求はこの理念に当てはめると、地域とつながって地域のために地域を愛する人材を育てることを目指すため、最上級の５番目の「自己実現欲求」以上に当たると思います。このマズローの欲求理論で重要なポイントは、欲求は下の土台から順番に満たさないと成り立たないということです。例えば、５番目の「自己実現要求」ばかりを目指し夢が実現されたとしても、生理的欲求や安全欲求が満たされておらず、心身が健康ではなかったり、心からつながれる人間関係がなく、孤独であれば幸せを感じにくいことになり、順番を間違えると逆に幸せから遠ざかってしまうことになりかねません。したがって、「ムトスの学び」に戻ると、幸せは１番２番の「物質的欲求」と３番以上の「精神的欲求」のバランスがよく満たされることで実現されるのではないかと思います。新型コロナウイルス感染症の拡大前から不登校児童数が３倍に増えたと聞き、このような状況の中で、浅い議論のまま、「ムトスの学び」の理念を目指して頑張っていこうというのは、あるこどもにとっては危険な側面もあると思っております。なぜならば、不登校児童の多くが「生理的欲求」である睡眠を取れてない、基本的生活習慣が乱れている、心身の健康を保てていない、「安全欲求」である家庭が安全・安心な場所ではないなど下位の欲求が満たされていないことも多いと感じております。満たされている欲求段階は、こどもたち一人一人が違うことを理解して、一人一人に寄り添ってサポートしていくことの必要性をすごく感じております。以上です。

○林企画部長

ありがとうございます。林委員お願いいたします。

○林委員

説明をいただきとても納得しているところです。私も前に新聞で「学習性無力感」という言葉を聞き、おそらく自己肯定感や有用感と相反することだと思います。新聞で読んだ例は、生徒会で高校生が校則を変更したいと提案したが、生徒会では良いという話になったのに、担当の先生から「そんなことよりまず今の校則を守らせなさい」と否定されたとありました。記事の中では、義務を持ち出して権利を否定するおかしな例だと書いてありました。その頃同じような例を大変身近で見ました。何かを変えていこうというこどもたちの思いを簡単に否定する動きがあると思います。これは学校現場に限らず、子育ての中でもあることで、「そんなことよりこういうことをしなさい」とどうしても言ってしまいがちです。家庭で自分自身も振り返って反省しますが、中学生、高校生になって、自分自身が思いを叶えたい、何かを変えたいと思いを発したときに、大人からしたら「なんでそんなこと言うの」、「そんなことよりこういうことが大事じゃないか」ということがいっぱいあると思いますが、未熟であっても、自分たちで考えて決めることがすごく大事であり、こども基本法にもあるこどもをまんなかに据えるという考え方であると思います。今回のテーマで「自己有用感」という言葉が出ていましたので、自己有用感や自己肯定感を大事にするために、学校や社会で大人がこどもを認めて、「未熟であってもいいんだよ」ということをちゃんと発していけると良いと思います。

同様に、失敗を認め、失敗をむしろ勧めること。学校でも、家庭でも、時間的余裕がない中で、失敗を恐れてしまう。「ムトス」につながる一歩踏み出す部分を恐れてしまうお子さんが多いと感じます。本当にやりたいこともあるんだろうけど、それが見えてこないのは、レールに乗っていれば安心だという気持ちで、自分のやりたいことが分からないお子さんも多いです。「こんなこと言っても認められないかもしれない」「失敗したら怖いな、嫌だな」という気持ちがあると思うので、特に学校現場でも失敗をしようよと言えると良いと感じております。以上です。

○林企画部長

ありがとうございます。自己有用感や肯定感を感じる学びについての課題や進めていくべき方向性について御意見いただきました。熊谷教育長お願いいたします。

○熊谷教育長

林教育委員の校則の話はまさに「不適切にもほどがある！」というドラマに出てくる昔の教育の価値観だと思いました。こうあらねばならないと求め続けてきた時代がありました。家庭も協力していた時代はなんとかうまくいっていましたが、実は乗り切れない人たちも当然いました。時代が

変わってきて、それが当たり前ではないと思える環境になりつつあると思います。一方で、社会を見てみると、「不寛容の時代」と言われています。失敗は許されない大人の社会の見方や考え方があります。トラブルがあった時に謝られても許せないという価値観もある中で、この「ムトスの学び」は、前回林委員が言っていただいているように、それをみんなが認め合い、共感し、失敗したこともある程度みんなで理解しあえる社会でないとなかなか成り立たない。麦島委員がおっしゃったように、欲求を下の土台から順番に満たさなければ「自己実現欲求」の成長力までいかないのも、社会的、家庭的、福祉的な幸せも含めて、そういう部分を一緒に「ムトスの学び」を目指すには必要だと改めて皆さんの御意見をお聞きして思いました。

〇林企画部長

北澤教育長職務代理者お願いします。

〇北澤教育長職務代理者

キャリア教育推進フォーラムでのこどもたちの素晴らしい姿は、これから学園構想が進み、「みらい創造科」の柱になります。この間見せてくれた姿はきっとその一端で、これから「みらい創造科」の学びが本格的に進んでいくと、ああいうこどもたちの姿がさらに見られるようになると思っています。ただ、ああいった子たちのような姿をモデルとして求めることが「ムトスの学び」ではないし、それが全て「みらい創造科」で求めているものではないと肝に銘じておきたいと思っています。地域の多様な人や物と関わって、体験的なことを通しながら学んでいく探究的な学びは、人と比べたり、評定をつけたりする学習ではありません。麦島委員が言っていましたが、一人一人が置かれている状況も違うので、ささやかでいいから問いや願いを持って、一歩を踏み出し、様々な取組をする姿を丁寧に受け止め、認めていく、小さな「ムトスの学び」を見逃さない「みらい創造科」でありたいと思います。筒井こども課長から説明があった「若者の話を丁寧に聴いていく」ことと重なると思いますが、特に学校で考えたときに、「ムトスの学び」を１番具現できる場所が「みらい創造科」になると思います。教師や大人が先に立って教える縦の関係ではなく、「何がしたい」「どうしたい」「どうする」という問いかけをしながら、対等の関係で大人も探究活動をしていく。その過程の部分が実は１番大事な学びの場になっていると思います。発表している姿ももちろん大事だけれど、実はそれが狙いではなくて、そこに行き着くまでの過程で、こどもたちが悩み、乗り越えることを繰り返してあそこまで到達している過程の姿こそが、こどもたちにとっては「ムトスの学び」の中身だと思います。発表をしたことはもちろん立派なことですが、これから「ムトスの学び」や「みらい創造科」の学びを積んでいくと、みんなああいう姿になると求めてしまうのは違うと思います。麦島委員がいろんなところが埋まっていないのに１番上だけ求めるのは危険だと言っていることの裏返しのような言い方をしています。推進していく立場にいる者はもちろん、そう

いう部分を学校の先生方や地域の関わってくださる大人の皆さんにも共有して進めていくことが本当に大事だと思います。そうしないと、この「ムトスの学び」が受け止めるこどもによっては、自己肯定感や有用感を高めるのではなく、「私は駄目なんだ」「私はできない」と下げてしまう学びにもなりかねないことを１番底辺でお互いに共有して進めていくべきだと思っています。この間も教育長と 28 校の校長先生全員と面談したばかりですが、校長先生方とお話していてもまだ「みらい創造科」の内容や「ムトスの学び」に対する認識にズレがあります。小学校で地域の人の力を借りて農園を耕してなるべく大きな大根を育てることがこどもたちの喜びにつながるという認識でお話をされる校長先生もいます。大きな大根がとれることはこどもの喜びですが、本当の大事なところは大きな大根を収穫するために、一人一人のこどもたちがどんなことを疑問に思うか。豚の肥料を入れたら臭いが、肥料を入れないと土は豊かにならないという体験して感じたり学んだりする過程が本当はこどもたちが学んでいくこと。こどもたちに一歩一歩実感として体験させて学ばせていきたい。踏み間違えないようにお互いにやっていきたい。学園構想の話になりますが、カリキュラムを作るときも、学校だけがカリキュラムを作ったみたいな受け止めにならないように、地域の皆さんや保護者の皆さんに、来年１年かけて方向を共有しながら、みんなで作ったカリキュラムである「ムトスの学び」という認識で進められると、みんなにワクワク感が広がると思っています。以上です。

〇林企画部長

ありがとうございます。関わる人や地域で共通的に持つべき大切な視点をいただきました。野澤委員お願いいたします。

〇野澤委員

我々ホモサピエンスとネアンデルタール人を比べると、脳の容積はネアンデルタール人の方が遥かに大きかったと言われています。なぜその種族が滅びて我々が残ったかという論文を書いている先生がいます。１番はコミュニケーションらしいです。皆さんの知恵が集まって一つの文化をつくっている。文化を残して後世に伝えていくことができたのが我々の種族で、ネアンデルタール人は天才ではありますが、そういうことをやらなかったため、突発的に発明してもその人で終わってしまう。我々は何か思いつくと、必ずみんなで共有することができる。今、地球上の脊椎動物の 98%はホモサピエンスと言われています。「安全の欲求」までしかネアンデルタール人はできなかった。上に行けたのはホモサピエンスだけだと考えると、こどもたちを育てるのは、我々が社会として間違いなくやっていかないといけないことであって、こどもたちも社会に少しでも貢献したい気持ちは必ず持っている。その貢献する部分でいうと、例えば母親が家事をしているところを手伝って「ありがとう」と言ってもらうだけで十分社会貢献だと思います。そういうことの積み重ねが、自己肯

定感、有用感につながっていくはずです。それが我々の社会の根底にあるはずなので、そこをうまく教育の現場にも生かしていけると良い。この間の公民館活動やキャリア教育推進フォーラムを見ていても、ものすごい活動量でいろんなところにみんな出向いていろんな人と関わりをもち、「すごいね」「よく頑張っているね」と言われていることが「ムトス」につながっていくと思うと、大人がどういうふうに見て、こどもたちと接して、どうやって社会を培っていくかが非常に大切だと改めて今思いました。一人一人が隔離された状態だと社会が成り立たない。みんながつながっていかないといけない。今のこどもはいきなり携帯電話ですが、私たちは黒電話から経験している。今のこどもたちにそれをゼロからちゃんと体験しなさいと言っても絶対やらないです。重なった文化を享受できる状況があることが我々の素晴らしさだと思うので、それを上手に次世代へ送っていくことが大事だと思います。これが上手に送ることができて、初めて受け取る側が頑張らないといけないと思えると思います。大人の責任は相当重いと思いながら今日お話を聞いておりました。

〇林企画部長

ありがとうございました。市長お願いいたします。

〇佐藤市長

教育委員会事務局の皆さんと話をしていて、「みらい創造科」が何を目指すか、そこでは「ムトスの学び」で自分と地域の未来をつくる。野澤委員から「敢えて何をという目的のところを抜いてある」という話がありましたが、「みらい創造科」の目指すところとして、「「ムトスの学び」で自分と地域の未来をつくる」と書いてあり、すごく共感しました。「ムトスの学び」で実際に起こることは、その子が自分の好きや得意を見つけるプロセスに地域の未来が関わることでそれが見つけられる。「ムトスの学びで未来をつくる」に敢えて目的が書いていないのはこのままで良いような気もするし、「みらい創造科」のように「自分と地域の未来をつくる」と書いてあるとより分かりやすいかもしれないし、どちらが良いのかと思いながら聞いていました。皆さんの発言の中に「人それぞれだ」という話がいろんな場面で出てきて、これはすごく大事なポイントだと思っています。素案の基本方針にも「一人一人が」とありますが、それぞれであって良いと思いながら聞いていました。

こどもに大人の未熟や失敗を見せる場面がいる。私が都会でこどもを育てることに危うさを感じていたのは、自然や地域との触れ合いがないこともありましたが、あるタイミングから均質な人たちの集団に行かないといけなくなります。こどもがお受験を経た後は、同じようなレベルの同じような価値観のこどもたちだけの集団にしばらくいることになり、そのまま社会に出ることをあまり良くないと潜在的に感じていました。一方で、この地域の公立校で育つことによって、こどもの家庭環境も様々で、いろんな人がいる状態を義務教育時代に過ごすことは大事だと思っていました。

自分が都会でこどもを育てることがしっくりこないと思った感覚を振り返ってみるとそうなのかなと思いました。翻って今回の「ムトスの学び」を考える中で、先ほどから出ているように、モデル的な人たちばかりを見せていくのが良いとは思わないと改めて思います。この間の公民館大会のパネルディスカッションでも、「地域のおじさんたちが酒を飲んで騒いでいる姿にちょっと憧れた」みたいな話がありました。僕らも含めてこどもたちに見せている日頃の姿は決して立派な姿ばかりではありません。そういうことも含めてこどもたちが地域の人と関わり合う中で吸収しているとすると、失敗やだらしない姿で酒を飲んで騒いでいるのも、大事な学びのプロセスなのではないかと思います。失敗や大人のいろんな姿を見せることができるという意味で、地域との関わりは大事で、教室だけでは得られないと思います。そういう意味で地域との関わりを持った「ムトスの学び」が均質な立派な人たちだけではないというのを見せることなのかと思ったりもします。「それぞれ」や「つまずいても良い」というのもうまく表せると良いと思います。

〇林企画部長

ありがとうございました。大綱の素案の部分についての意見もございましたので、視点として入れた方が良いことがありましたら、御発言いただければと思います。教育長お願いいたします。

〇熊谷教育長

ブレイディみかこさんが書いた本で『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』という本があります。アメリカは底辺と言われる公立学校と学費が高く、先生の給料も高いため、優秀な先生が集まる学校もあるという話を聞きました。お母さんが敢えてこどもを公立学校に入れることで、人種や経済状態が違う中で、自分の我が子が失敗したりうまくいかないことを経験し、成長していくのを見守るという本です。一人一人を大事にする主体的というのは私が教員になった頃から教育現場で大事にしてきていますが、みんな同じようにできることを大事にしてきました。しかし今考えると、失敗を経験することが、特にこどもたちのときにはとても大事な経験で、それを乗り越えたり、あるいは逃げても良いと思いますが、生き方を学ぶことはすごく大事なことです。みんな同じ一人一人という意味合いではない方が、「ムトスの学び」にもつながっていく。違っていることを認め合える社会にすることもすごく大事です。飯田下伊那はある意味均質な社会ですが、意外と見えないところでの差はあると思う中で、違いがある、それぞれで良いというところは大事なキーポイントだと思いました。

〇林企画部長

ありがとうございました。北澤教育長職務代理者お願いいたします。

〇北澤教育長職務代理者

「みらい創造科」の学びは成果を急がないこと。うまくいかないこと、相談したり、立ち止まっ

たり、回り道をしながら、理解や思考を深めていく学びの過程を一緒に伴走している教師や大人は、その子にとっての「ムトスの学び」が達成されていると受け止めができるように、本当に細やかに寄り添う。テストがあるわけでもないし、評定が付く科目ではないので、こどもが安心して自分のペースで自分の学びができるようになったら良いと改めて思います。それが、やって良かった、自分もできたという自己肯定感や有用感にもつながり、本当の意味の誰一人取り残さないことだと思います。学園構想が４月から始まりますが、これまでは学園構想の理念や組織の回し方について、あり方審議会の皆さんが審議されていましたが、４月明けたら１番大事にしなくてはいけないことは、こどもたちが学園構想をどう受け止めるか。こどもたちに問いかけて、学園構想の中でこどもたちがどんな学園にしていきたいかをとても大事にしなくてはいけない。それを考えさせること自体が、「ムトスの学び」であり、当面の「ムトスの学び」の１番の大きなワクワク感のテーマだと思います。今まではどちらかというと、大人が学園構想を考えてきましたが、形がある程度できたので、１番肝心な中身を考えるとき、１番先に問いかけたいのはこどもたちの思いです。それがなくて始まった学園は、こどもたちにとって「なんでこんなことやっているのか」と終わってしまうと思います。本当に「ムトスの学び」を中核に据えて具現していくには、まずはこどもたちの考えを聴くところから始めたい。野澤委員から「話し合うことができるのは、私たちの１番の大事なところだ」という話が出ていましたが、こどもたちにも話し合ってほしいし、大人とこどもたちとの間でも話し合う場を、まずは大事にしてスタートすることではないかと思っています。

〇林企画部長

ありがとうございます。林委員お願いいたします。

〇林委員

教育大綱の基本的な方針の言葉自体はとても良い言葉が書かれていて素晴らしいと思います。ただ２番目の「こども・若者が地域づくりに主体的に関わることで自己有用感、自己肯定感を感じる」という部分について、公民館大会の分科会で同世代の人が、実は全然主体的ではなく、嫌々やっていたら「やって良かったな」ということがあったと話をしていた。この言葉を変えてほしいとわけではありませんが、主体的でなくても巻き込まれることで、だんだん好きになったり、「あっ、いいじゃん」となることもあります。

肯定感や有用感にはいろんな捉え方があります。「あなたは役に立っていますか」と聞かれているとしたら、しんどいと思う人もいると感じます。主体的に関わって、そういうふうに感じられるように環境づくりをしていく理想を描いていると思いますので、これ自体がどうこうという話ではないが、そこも気を付けていきたい。主体的でなくては駄目、有用感が得られないと駄目ということではないと北澤教育長職務代理者の話を聞きながら感じました。以上です。

〇林企画部長

ありがとうございます。人それぞれ違いがあるということを前提にしながらお話をいただきました。

〇佐藤市長

巻き込まれの話は飯田の公民館の評価の一つです。「巻き込まれた結果として楽しくなってしまうのは飯田の人の特徴だ」と牧野先生がおっしゃっていました。最初から主体的な人はほぼいません。

〇林企画部長

そろそろお時間もまいりますが、気付いた点がある方は御発言をお願いいたします。野澤委員お願いいたします。

〇野澤委員

先ほどの市長のお話で、「いろんな面を見せても良いのではないか」というのは、学力や運動能力がいろんな場面でデータが出てきますが、正規分布ではなくなっている。平均点が通用しない分布になっていると思います。個々に対応していくことが大事だというのは、皆さんがおっしゃっているとおりだと思うのと、僕らがこどもの頃は特徴的な先生がたくさんいらっしゃった。今はゼロではありませんが、平均的な先生が多くなってきていると思います。そういう社会の変容が起きていると感じます。自分たちは平均的なことばかりできる大量生産の車に乗った生徒児童でしたが、今のこどもたちはそんなの通用しない状態だと思います。個々に対応していくことが一つの大きな課題。なんとなく平均点的にやると、実は個々を見たときに全然そこから外れている可能性があるので、一人一人の心が立たないにしても、興味を持たせることを考えると、平均的な対応は１番外れてしまうのではないかと思います。

〇林企画部長

北澤教育長職務代理者お願いいたします。

〇北澤教育長職務代理者

４月から学園構想が具体的に始まるので、こういう話は来年以降の総合教育会議でテーマになる部分もあると思いました。来年９つの学園が始まります。学園構想の上でもとてもワクワク感があります。９つある学園の規模はバラバラですが、９つある学園がみんな同じ方向の学園になってほしくない思いがあります。例えば小規模な学園は小回りが効くところを逆手にとって、柔軟性のあるカリキュラムが組めると思います。学校の授業時数が小学校は 40 分、中学は 45 分でも良いとなってきました。中学校は 45 分授業で７時間やっても１日の日課は十分組めると思っています。月火木曜日を７時間に、金曜日は午前中３時間の授業でも授業時数は埋まるわけです。金曜日の午後

は丸々「みらい創造科」の探求学習の時間とし、地域に行って探究する時間が夏場はたくさん取れる。逆に冬場の時間になったら、数学や英語が普通は週４時間のところ５時間にして、ゆっくり丁寧に学ぶ。教科の学習の中にも「ムトスの学び」はいっぱいあるわけです。そうすることも十分可能になります。現に高陵中学校のような 520 人ぐらいの学校でも、学年の枠を取り払って全校１年生から３年生に地域でどんなテーマを探究したいかを募り、去年は最終的に約 20 のテーマに絞られました。１年生から３年生がやりたいテーマに集まって、１年間探究活動をし、その際は発表会をやったり、お世話いただいた地域の皆さんにも来て何かやっていただくような枠組みを考えているらしい。来年はさらに発展させて、地域の企業の皆さんにも関わっていただくことを考えています。大規模はダイナミックな枠組みがあり、小規模はさっき言ったようなことができる。バラバラを認めていく学園構想が進んでいくと、県も進めていますが、ベースは地域に置きながらとことんやるところが、飯田の学園構想の中で「ムトスの学び」を軸にして進んでいくと思います。

〇林企画部長

ありがとうございました。時間の関係もございますので、本日はここまでとさせていただきます。非常に積極的な御発言をいただき、ありがとうございました。ただいま、大綱に関わることも御発言いただいております。イラストの書き換えやプロセスの話をいただき、どこまで反映できるか難しいところもありますが、本日の御意見を参考にしながら検討していきたいと思います。本日出た御意見を教育委員会事務局を含め、事務局の中で調整させていただき、修正案を改めて御提案申し上げたいと考えております。具体的には、次年度の第１回の本会議でお示しをさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。それでは、最後になりますが、教育長に全体的なコメントをいただき、その後、市長から全体を踏まえた終わりのごあいさつをいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。それでは教育長よろしくお願いいたします。

〇熊谷教育長

「ムトスの学び」を中心にいろいろ御意見をいただきましたが、自身を振り返ると、真逆の生き方をしていて、小学校の通知表には「もう少し積極性がほしい」とずっと書かれていて、人の影に隠れて生活しているようなこども時代でした。常に「私がやります」ではなく、「お前やれ」と言われて「嫌だな、しょうがないな、やろうかな」と思いながら、「ノー」と言えずにそのまま「分かりました」と言ってやってみたら、結構やりがいがあったり、面白かったりしました。まさに林委員が言われたように、巻き込まれているうちに、その面白さやそういう場を与えられたことによって、主体性が出てくる子もとても大事だし、エネルギーを隠れ持っている場合もあると思いました。大事なことは、最後に北澤教育長職務代理者がおっしゃいましたが、「小中一貫ができて何が変わるのか」と言われたときに、今までも小中連携一貫やってきましたが、学園構想を進めること

で、あるいは教育大綱を考えることで、皆さんがワクワクする気持ちになって進めていくことが大事だと思っています。巻き込まれた場であっても、何かきっかけがあればワクワクドキドキを求めて「ムトス」のような学びにつながっていくことが、学校や仲間でも自由にできるし、それが地域でも当たり前に認められる。大人がそういう姿を見せることもすごく大事だと改めて感じました。教育大綱を検討する機会をいただいたことで、この地域やこどもたちがどのようになると良いのかを少し描かれつつあると思いました。ありがとうございました。

〇林企画部長

続きまして、市長、お願いいたします。

〇佐藤市長

ありがとうございました。興味深い議論ができたと思います。特に教育大綱素案で書かれているすごく良い言葉だけだと、取り残されてしまう子やバランスがうまく合わない子がいるかもしれないというのは非常に重要な御指摘だったと思います。そういう視点はとても大事だと思いました。

学園構想を４月から実行していくに当たって、こどもたちに自分たちの学園をどんな学園にしたいか、どんな活動をしたいかを考えてもらうのはとても良いと思いお聞きをしました。教育委員会が主体となってやっていただくことではありますが、今回両方が重なる部分として「ムトスの学び」という教育大綱を定めようとしているわけですから、その実践として各学園でそれぞれの地域とどんな声かけをするかを、こどもたちをまんなかに置いて考えることはすごく良いと思ってお聞きをしました。先ほど企画部長が申し上げましたように、年度が替わってから改めて教育大綱の正案を検討しますが、それまでの間にそれぞれ考えたことを伝えながらまとめていければと思います。今日はありがとうございました。

４　その他

〇林企画部長

御発言のある方お願いいたします。

―発言する者なし―

５　閉　会

〇林企画部長

以上をもちまして、第２回の総合教育会議を閉会させていただきます。大変ありがとうございました。

閉　　会　　午後４時00分